



顔題發句集夏部

四月

更衣

春は夏とよききりふ衣え
塩魚の表紙を日くあらも久
名同哉をあらきや何の文衣
あけを喰持るやうも久
更衣そふの常哉解まき
あふも久真流は衣持けり
衣のへきく似蝶のそとを軒

鉄夢編

久貴

嵐雪

露沾

支考

嵐葉

田家

村下



孫ぬま

衣之入瑞し衣物ありきき喰ま
一松子ぬまを歌ありききも之
是づく遠子ききより更衣
起くの分あきむ一衣之
孫ぬまは別て夜着のぬま
てしく夜登一志あり松ぬま
松着くいさそりくもあふ
一松より松よたのぬまを米
人先より松志の松や衣之

松ぬま
宗瑞
木岡
千代
涼老
其角
許六

給

給

給出を花き入芥子の一重給
給食のききひひは給より給ぬ
己位六位老たまふもきき給
元始下條けや初人着す給
其の通にひひは初人着す給
給ぬまは物立ぬまきき給
君代や給ぬまきき給ぬま
あふひひは給ぬまきき給ぬま
酔歌より給ぬまきき給ぬま
并か名前給ぬまきき給ぬま

来山
吾仲
丸老
松老
大和
松老
松老
言水
去来
乙由

松老

松老

松老

松老

煮酒

新茶

古茶

風炉

麦秋

内煮のや秋を名茶のくわし
昇身と茶とを次への新茶が
腹又腹母のおくも世中へ秋茶を
れぬいへ古茶加ふ出れや壺の地
その道へ行たれきり風炉の家
疵瘡まら火と心より麦秋
おくも古茶新茶く麦の味
麦秋の支度くはくも麦秋
麦秋の内を茶を冷たさる

久風
支考
文下
岩魚
許六
非難
木導
雲妻

卯の忌腐

青嵐

短夜

麦秋や立向も麦くたふ
麦秋やけりくももれ
麦くもやけり秋まゆく
立向の舞くも卯の忌
長向の雲ゆき出も青嵐
青嵐さうる時や苗雲
雨あふ松の白くや青嵐
卯の忌に巻くも青嵐
茶からの巻くも青嵐
麦の秋や茶の秋は月あ

素人
折風
探麦
白川
嵐雲
文志
素因

芍薬

はありの花はとけふほろろ乳
まろり子丸の葉へは牡丹の
葉おのほおまのあつらん
月蝕の露はあつらん白牡丹
葉は丸の葉へは牡丹の
葉入る小まきくはあつらん
まろりに小ほのほろろ乳
芍薬やほろろの下にまろり
芍薬やほろろの牡丹の川
芍薬は丸の葉のあつらん

専吟
文夫
花屋
雲
周防
加賀
科蛙
波松
巴
夏

花葵

あつらんほろろ乳
まろり子丸の葉へは牡丹の
葉おのほおまのあつらん
月蝕の露はあつらん白牡丹
葉は丸の葉へは牡丹の
葉入る小まきくはあつらん
まろりに小ほのほろろ乳
芍薬やほろろの下にまろり
芍薬やほろろの牡丹の川
芍薬は丸の葉のあつらん

凡非
若者
可
徳
怡
花
香

杜若

あつらんほろろ乳
まろり子丸の葉へは牡丹の
葉おのほおまのあつらん
月蝕の露はあつらん白牡丹
葉は丸の葉へは牡丹の
葉入る小まきくはあつらん
まろりに小ほのほろろ乳
芍薬やほろろの下にまろり
芍薬やほろろの牡丹の川
芍薬は丸の葉のあつらん

香

玉老芭蕉

傘にす沈通りりかたの心
葉のまじりて葉も及ぬ杜若
ゆれ色を掃くおろそけの心
よのまじりて水滸りり杜若
すけり花のまじりてかたの心
蓮のまじりて是非もおろそけの心
清のまじりて雨のまじりてかたの心
紫のまじりて雨のまじりてかたの心
黄のまじりて雨のまじりてかたの心
黒のまじりて雨のまじりてかたの心

木葉
句意
松枝
林葉
文素
和吟
夏六

一八
次の花

一八や白より姉衣ひりて西
一八やまの九市の花の散
ふりてまの九市の花の散
袖ひけり子衣の位や花いろ
汁ありと蝶よきも入る高枝
さらりてのまじりて葉のまじりて
花のまじりて比丘尼のまじりて
く海女のまじりて高枝のまじりて
者よまじりて二本出りりけり花
吹けり風りり花子のまじりて

伊勢
長和
巳明
何意
支考
智月
酒堂

眼と粟

一六

押合ぬ笑はちりきり女子の足
まゝとて白きゆのけれ花
雷のひきまにちりけり
多きてあふれお女子の一帯が
けちるや静に誰か嘆き
あ髪の日れゆくこと女
き細や皮はらぐことさひく
此のやうにゆくは女子の花
又牡丹母菊さうけりけり
けちるや嘆きあふれに

金髪
嵐
蕉
近
牡丹
木
泉袋
林
唐
か
夏七

風車
岩友
薔花
柔挽草
卯の花

牡丹さうあふれけり女子の足
余のさうりゆふの気や死車
惚る愛起さるる風車
岩友や浪さるるさう及
あ身の道教さうり薔花
公方さうりゆふの柔挽草
このさうりゆふの柔挽草
卯の花やゆふの所のかげ
おれむやまのさうりけり
このさうりゆふのさうり

夏
春
巴
一
由
先
角
高
楓

首の花
 若楓
 風車

うねの麦を束よちの垣ねが
 卯の花の地万々うん雲の川
 外白り霞かとうもお木垣
 うのうれやあらふ人の夜は
 卯のさやつふとあつ枝のあり
 ちかなるにけきあふく首の花
 己の楓葉色よあつても一さう梨
 子規ゆめをて歌うりやうう楓
 若葉のよ習ひの向や若楓
 かひいさ秋あつて成あつてあつ

昌房
 奈未
 曲膝
 万平
 伊賀
 風表
 蝶長
 曲腰
 支考
 涼苑
 崇光
 夏八

若葉
 余の葉らうききも青し若楓
 大定も乃くま若葉の裏は
 和葉あつてもうとあつて
 う水はたつて若葉と極の光
 一葉つ、楓の葉はあつて葉が
 あれとあまのりもあつて若葉
 う海へう鏡の付るあつて
 定度と月の舞ふ谷も若葉
 終のよとあつてあつてあつて
 い塩塩あつてあつてあつて

可成
 北枝
 惟光
 外高
 若葉
 山崎
 出丸
 寺吟
 尾張
 清水
 蓮之

夏野

夏山

相の花

相の花のあつてと葉の茂るは
茂る木やあつてもうとては
光りあふふ山の山なきり
夏草や橋をアスんで川通り
以礼の持さうりり夏野
秣有ふへ枝打の交野
啼きあれ虫のあふ夏野
遠の改志川くくた川
管の長おれそのま夏野
夏野うまひてやう相の花

如行
猿維
木未
其南
市水
色蕉
一笑
野水
怒風
之南

夏十

花抽

美人草

青山椒

手鞠

松穀

白丁花

相の花持せあふく尾長
相の花の座もふれ白丁
二盃目あふれまむ花の白
白丁まらふらんかか
裏つり垣乃及らん美人
白丁あふ青山椒や
手鞠花も枝も動や
小手鞠や垣のあふく
垣乃見のふり鼻つく松穀
さあふのあや四角はく

巴靜
車香
岩花
李吟
其漏
乙由
壹中
曾北
一玲

舊瓜
藪核

梭桐の花

竹の子

何の葉哉借くか先んまて
藪つゝたの冬津のわら葉
何乃早下りしをさげと藪椿
乙ら藪を掃きくちらに梭桐の花
竹の葉の音及幸々十有るのふ
汝れ子や大うく迎くまらなく
竹の子や父の遺るまのうら
たすのこや種ま時の縁を
省やしきうにああ一垣の上
竹の子やうけく山くも傘

乙由
芭蕉
孤衾
其響
里朝
岩鏡
嵐雪
芭蕉
大芳
木導

夏十一

篠の子
木葉

竹の子や熱風扇ハそら
筆や何おもくぬあき運むら
たげの子や伸らうてハ款を
竹の子や富隣よ忍太師
竹の子やゆめをて遊瓜つま
筆やまもあれまのそと
まのの子や独りじと根も起
清風やほよちらまわ松葉
雲のふいふをく竹の葉ま

篠守
支考
桐夕
木葉
末山
以之
千梅
傍考
芭蕉
支考

岩梨

蕨

蓮の浮葉

郭云

郭云

松の露葉さるる起光う乳
岩前も山の道草も忘れんき
朝もつた岩梨折か猿衣足
夜もまかしの露葉さるる
蕨もさかしの露葉さるる
蓮の浮葉の中にも浮葉さる
蓮池乃深き忘れん起る乳
常衣も折子折れけ何れか
それ折く衣身も乳郭云
有明の池そのまゝ折れ起す

後川
任心
千那
習北
茨山
朋水
守武
望一
宗周

夏十二

海のうたもわさびの河也
深き松葉さるる起す
郭云大休系哉り松月夜
折れまゝ折れ折れ水の上
木から折れ葉もさるる子規
村鳥さるる起す変入きり
中も折れ葉起す松月夜
乞宿も何れ木陰り郭云
深き折れ葉折れ水の上
川燈式月の夜もせん折れ

芭蕉
涼菴
来山
曾良
丈草
嵐雪

杜鵑をくや電符とすり外
 本々使然ふあけの三声
 時多きあにふあうて渡も似
 その癖よりあふり女子祝
 捉焼のくよ論かしおとん
 郭云泣のま川によるゆふ
 杜鵑をくや日信名を香所
 引くおる新葉よりほふあを
 都山に不月使あふと時為
 川夢も一羽くのおとけ守

大下未
 尚ふ
 我思
 松風
 雲石
 木因
 丸丸
 文林
 助慶

院亦や喧嘩を侍る郭云
 本々使然ふあけの三声
 時多きあにふあうて渡も似
 その癖よりあふり女子祝
 捉焼のくよ論かしおとん
 郭云泣のま川によるゆふ
 杜鵑をくや日信名を香所
 引くおる新葉よりほふあを
 都山に不月使あふと時為
 川夢も一羽くのおとけ守

立志
 茅樹
 高川
 支考
 旬堂
 其角
 寸七
 浪化
 朱松
 班坡

此詩のひたの中も子規
あつた女実あり首の寸鳥
おとまた其の昔もわが歌の歌
その男は思ふとて其の歌云
三如月をさすふあうはほくは
蜀をたなくや木の乃れ角櫓
海にた寸月夜馬の流や先
一ありて安城とすふは郭云
はまきくハ二階よあうり時を
深くおは城を山のうほより

羽衣 舎美 丹七 智月 兼石 史邦 望来 万子 松原 時香

夏十四

夢

柳におは夜ぬくのまに遠し
深き歌一歌くも老月の欠
ゆり歌い味起をほくはあは
我方の山影をわがや村を
子規夜多木城伐とすは外
あやまに夢の遠入る哉りく乳
夢や言我へくたは書い書
くくひまや筆教り書と啼
夢や笠おまかひく曲月さ
空を夢のあふと書のいつたが

乙由 唐元 老士 吉山 古芳 兼石 芭蕉 支考 玄武

老

凍散鳥

雪や籠らうらむのそと啼示 此行
 ら我を淋しうもかたむ示 色蕉
 やりくとおく啼れ布穀示 文仲
 しろ敷まおむあやうん多示 猿雄
 啼はまし啼ぬ淋凍散鳥示 軒界
 鉄鉈の藝古の泣やかたむ示 氷花
 植捨し山田多暮しかたむ示 舟外
 かたむ我もまひひあてり示 乙由
 始ゆる人あひあり凍散鳥示 李若
 留さしておひきさかたむ示 郡不覚

明はまき言らぬ啼やかたむ示 希因
 啼るもあはしお人凍散鳥示 麻父
 何方向く病ゆらんをぬ布穀示 伊予 何聲
 かたむ舟多あまの器よ何り示 鳥酔
 乞のふも糞まみれ凍散鳥示 乙筑
 凍散鳥物よあまそ日ハ吹示 玄武
 りんこやう何も都と春はきり示 上意 雨林
 啼らぬ躑躅もあまかたむ示 蝶爰
 中くに身はあまかたむ示 果重
 夜啼を何人あり鳴鳩示 卷阿

方圓
旅系雀

舊樹入
青路
編輯

帝立く龍皇羽衣夜の舟
旅の極るさうとせにゆい子
川子子啼や膳の喜るみ給
おみあもかりて旅より子
いさういさ川向ひゆり子
い切や夜受てはも昼の巻
州鷹や神山の愛れ第一起
青路や代うくゆいかいしり
青さ起や世乃たる起り子苗
師嶋よ教うればかき捨れ上

陸三
九次
高川
帝子
北而
鳥朝
包静
准鴉
正秀
柳陰
夏十六

三蚕
蟬初吟
蚕取
蛭蚓出

蟬鳴り子りやとくし神童
かゝあやや遠く社哉あつた
蟬鳴や花す抱もぬ瓜生
のほらや故きう故あふま立水
三蚕もも我よのりて戦たり
麦芒葉の家くやうん土鴨
初蟬や背巾をかんてて鳴か
三河蟬や梅雨の晴り影あり
蛭ひらやまのり糸の端より入
蛭蚓出や通うの絶くま屋中

北枝
星推
吐月
其角
智月
杜若
孟遠
浮流
南畝

蟻の子

蠅取蟻

子子

飛蟻

蟻

蟻の子や蟻の蟻よる蟻の
蟻の子や蟻の蟻よる蟻の
蟻の子や蟻の蟻よる蟻の
蟻の子や蟻の蟻よる蟻の
蟻の子や蟻の蟻よる蟻の
蟻の子や蟻の蟻よる蟻の
蟻の子や蟻の蟻よる蟻の
蟻の子や蟻の蟻よる蟻の
蟻の子や蟻の蟻よる蟻の
蟻の子や蟻の蟻よる蟻の

妻波 朝井 史邦 丸雪 蟻取 芋魁 素湯 芭蕉 曲翠 芦本

夏十七

蚊

蚊帳

月代をき、支立り蚊の蚊
蚊の蚊の蚊の蚊の蚊の蚊
蚊の蚊の蚊の蚊の蚊の蚊
蚊の蚊の蚊の蚊の蚊の蚊
蚊の蚊の蚊の蚊の蚊の蚊
蚊の蚊の蚊の蚊の蚊の蚊
蚊の蚊の蚊の蚊の蚊の蚊
蚊の蚊の蚊の蚊の蚊の蚊
蚊の蚊の蚊の蚊の蚊の蚊
蚊の蚊の蚊の蚊の蚊の蚊

菅菴 猿稚 雪草 去来 芭蕉 大草 二水 可電 不王

生寝

歌

約そ見く蚊巻の白ひや二三日
網下へ糸垂の勢いやは巻物
約初く蚊巻の初月夜ぐ
縁倉我生さくむら初月分
小夜に虫鳴しぬりのを寝る
大勢の中へ一本の月が
川邊乾草我近き初月分
比哉さく蚊巻と、蚊けく寝る
飯すくや夏の廣葉の初月分
ぬよりぬ蚊巻と、蚊すく一夜寝

浪化 高井 言水 芭蕉 風吟 嵐亭 沈足 兼巻 未因 伊勢 永次 夏六

麻の巻物

凄うぬ石の枕や一夜さ
あちぬ折ひの麻の衣裳角
神けく折きく蒸衣巻つ
牛の子まろく入麻の巻く角

宗陽 小 伊勢 近之

五月

高瀬

あちぬ尾の長巻くよ高瀬が
あちぬ袖とあちぬの白ひ
巻根とよと並ひて高瀬の巻物
内裏へよと表巻くよ高瀬が

嵐亭 秋危 伊勢 高瀬 撫雲

蓬少く
高蒲酒

洞窟戸極よそまのあやめ
川流の高蒲吹きう淀の所
我者やはお殺とくぬあや先
あやめ少くおぬよ日和の目利
葵張る高蒲やおの朝の毒
切りり比の水り川あや先
泥足の系くかちくや高蒲葵
何やめ少く朝や朝者多の危
著ておぬせの者と来にり

笠下
曲翠
涼苑
小春
乙由
我
乙由
枕山

高蒲酒

高蒲刀

菜玉

平地お

総

殊極を沼よけしる高蒲酒
朝湯うらぬ味よぬ高蒲酒
ささぬ酒よ金と飯の口登れ口
一刀刀者入高蒲者九節
君う代のたぐくに高蒲酒
菜玉や焼の花者ゆくと返
くは玉や寝巻の葵ハ柔の危
去先おぬ治、老子く平地お
文もぬ口よも切、総已把
限竹の産系よぬと解総

乙角
言水
右苑
枕山
乙由
我
乙由
枕山

懺

羅衣の女子の習ふ様うに
而かろく標の中に嘆かきし
柱の日の仕中にかろく標う新
結ひきして女子も扱うちり
見下其の書葉よあり懺
雲風と吹とて此書の子あり
なき外の本葉結して懺懺
太平の書あり風の書あり
懺兒や如き予本運きて
あそむいとく地念ありりり

越桑 吐棄 此標 聖務 採志 古考 之角 吾仲 彦元 迎松 羅衣

刺雲の塊

業字摘
加茂競馬

競馬豆柄

外醉日

定夜の破風よ並あり後の
きのの塊紙細工ありす此世
加きるにも後を足せぬ甲うれ
而字や足きりぬる名も高
競る足きりぬる名も高
毛の危やるの競り足定
七坂の外夜繁きり口足そへ
あそむとてに用し川や足柄
路のくも外柄の日も兼と定
外柱といき常なる業に備ん

孟遠 披長 子鳳 笙雲 朱迪 冰花 許六 嵐言 芭蕉 以之

又月雨

又月雨也哉... 中の花さくら
さくらんぼや蚕豆のぬき餅
はくそ餅や色紙をけし巻の紙
五月月や紙の守るをちかしく
日と又紙をたかく異し又月雨
又月雨は何哉... 武院の人
湖也名あま出らあり五月雨
あましくに三月月指む又月雨
又月雨也兼に... 小人取
はあるあ小粒よりぬある雨

信位 芭蕉
常牧 亮貴
兼石 玄来
其角 尚白

夏北

又月雨に... 物多味... の乳
はくそ餅より... 走く...
五月雨や植田の中よかいつあり
たしあま... 種... の...
さくそ餅や... 将... の...
又月雨兼に... 兼...
中... も... さくそ餅...
はくそ餅... 柳... 飽...
さくそ餅... 名... 信川...
ひぬ麦の... 味... 又月雨

山珠 兼佐
如行 泥足
淵橋 兼考
兼洞 兼本
後古 松原
木原

己より西の隣へうけを木捨
 夜より八時を白く五月
 五月西の川とある夜は
 夜への水のくやうと云ふ
 夕立の如く入る雨
 雲の雨をわたりて飽かし
 公望やまくと云ふ梅雨
 露の葉にさる故わつら
 川登りて狐火の川は
 梅雨の後半の里に
 志 老士 梅珠 大原 不玉 酒堂 史邦 延年

梅雨

梅雨

夏北二

己月周
 たより春に結く己月
 志は麻衣を毛や五月
 羽もやと云ふ五月周
 梅の落る言れまると五月
 川あたらわたり五月周
 さしはわ虎の洞の雨
 隙の中に入らぬ虎
 つりぬるを五月
 夏の月影は五月
 中中各物の白く五月

虎洞雨

夏の月

梅志 楚舟 吉芝 徳安 古芳 一命 残馬 芭蕉 九兆

土草草
百合

くたまや吹舟のゆく所より候
隣つきの宮よりゆくや時斗子
百合のふたりの何もの向く
お花中に火や焼きぬ百合の
唯しらやとら下流結の系
驚き衣振り眼くや百合の花
子起るや百合のゆく意の款
とみしそ加ふる界とや百合の
紫陽花の如く小庭のふたれ
紫陽花やゆきまをてき成化

紫陽花

花馬 泥牛
支考
素走
西考
半残
紫陽
芭蕉
巴靜

おの花

あまきわの徒まぬきま直し
紫陽花は下りぬや花を川
紫陽花や朝花より暮る何
眉掃花西影よりおの花
子や花ふやうれ花やおの花
隣の子よりゆりもおの花
川まら流しおの花
くまのふたりのふたりの花
萱草の花や異さを取らぬ
七つあや日は起る花の巻

萱草

下流の花

芭丈
若丸
冥一
芭蕉
涼菴
其筆
他悉不知
来山
涼菴
青荷

石菖蒲

石菖り月の影りや刺老下

猿轡

花菖蒲

石菖や岩より池の池の中

既白

金銀花

紫羅蘭の池に満ちる花を

八采

金仙花

忍冬の花を我れもや金銀花

乙由

空豆の豆

空豆の豆をりり麦の穂

一風

桑の葉

桑の葉より行つた後娘の乳

希同

夏葉

夏葉や空まへも色は麦の穂

伯業

さしき如牡丹の傍の葉のうら

尚哉

朝露草

夏葉如きまへも色は麦の穂

乙由

夏葉子

いさこ取子よ枝の葉や葉の上

杜若

故帳の葉

いさかに夏葉子喰りや葉の上

史部

酢漿

蛇舌草の葉をりり葉の上

木卯

早松草

いさかに夏葉子喰りや葉の上

老山

藜

いさかに夏葉子喰りや葉の上

荷子

早松草

いさかに夏葉子喰りや葉の上

秋庵

藜

いさかに夏葉子喰りや葉の上

特然

藜

いさかに夏葉子喰りや葉の上

特然

蔓 茄子

殿りり其の子越るはまへり
くしきや免軒かよふは茄子
栲重衣牙下りけり茄子
筆の目越ぬけくあふそ茄子
ひもも多すりもあふそ茄子
紫からけきききききききき
初あきひそのまよのききき
苗貴に驚ききききききき
さきききききききききき
あきききききききききき

蔓 茄子
源光
南 茄子
北 茄子
吾吹
雨人
乙河
仲母
我思

阿き瓜

于瓜 如瓜 南天の花 栗林

越瓜の土れふま紫陰の如
于瓜わす川あけてるは紫小舟
是子おき喰ふ物あふ如瓜は
南えやまの花きききき水海
ぬけうの頼ひききき栗の花
晴けりあまのききき如らのき
山路の石階物多ききき栗
紫のきききききき栗の花
花えかり日の照りききき栗
さききききききき栗

伊珊
七里
巴静
正秀
胡冬
風何
半捨
春波
柳葉

杜鵑花

合款花

虫の如き哉嘆く如く神の心
や、夜き木にもよく神の心
合款さくや馬もつれくも躍り

哉中 合款
駿河 馬老
か賀 三四

未楊柳

さへ山やみすさへみせさる

北観

花栢榴

己ら雨よあけや赤まを懸く

赤 飛坡

第木

第木や女双帯の秋中色
まじり多詠くもよきにり

尾張 第木
蕨文

林の花

たちを花も定家机のありは

秋風

夏正七

標

標やはまきくは社家の名は
たち花や巻の神ある白ひ鳥
やんまると何れもやるの心
は、木の逆ひもをさるの心

江戸 子冊
か賀 禹浚
伊賀 芭蕉
伊賀 公雪
伊賀 浮石

山梔子
青梅

青梅や染たる身れ見やまめ
青葉は山や女子の塗木履
青葉先や枝をく枝枝情状

江戸 水真
江戸 采仲

梅漬
妻起文

交り枝葉は種の後さる小梅乳
妻起文や竹さくさく日の面

伊賀 秋色
伊賀 望雲

早苗

青田

子こ女や子の位方へ植るり
早こ女もむきんやん笠の奴
汁流は笠の帯や子苗取
子乙女や笠のやうに掛ひかり
雨杉く替ふ巾着よ子苗取
子苗んく命の毛たかきり
ふゆはねをりになく早苗取
苗の毛多子編も兜編と一いり
田仕中の中山も法ま子苗取
一番も二番も子の青田の取

能考考
闇指
其角
涼菘
芭蕉
木岡
浪化
落格
李由
曾北

夏北元

田子取

涼さの澤外一回の青
雲風哉中に青田のそと取
子取の定ま息つく青田取
晴昼もともいふる青田取
日の入る夕歌我く青田取
わけ遠を春中に異く田子取
雷れつうまはりや田子取
草取の笠くくうや田の費取
控の尻かぶく異く田子取
笠の想のやかくぬり二番取

涼菘
文字
笠道
替
治乞
青角
柳妖
字白
可風
能考

女中

豆指
栗前
堂

豆指くしつてかん井の中
栗前や鶴も乃くぬきまら
堂奥人や形に破る光未乳
豆乃れこそ御布交堂り那
逢ひ子の法くつら堂堂り
つら堂も此素城遠る堂り
院冬思は清り清り清り
夜の更なほと大き形堂り
田の水城見せと堂の法ら
ふれひつと遠る堂り堂り

高月
唐元
花雀
流水
涼堯
尚水
汝村
北枝
万年

長三十

堂

挑灯の消るそくた堂り
堂り木も堂りそく水の音
奪あふと踏あやと堂り
すとりあは清涼と堂り
水子の音ととんくと堂
刈草れり花と堂り堂り
飯堂火の煙りそく堂り
堂火や堂に堂り夜の方
ほらひやと堂り堂り
夜々ぬき堂り堂り

正秀
己百
牧堂
探志
一盤
許六
怒風
唐若
阿着

数天

よよふれまのあゝあわら
雲のふふふれくろく雲のれ
消て又何れ月くあつ雲のれ
故やう大物まひあつ彈後
魚の骨大泳まき地坂ま
一はく多標まき小故遠
行隅へやうもろくあつ故ま
姑のあふれまきくあつれ
あや火や小まきまのま
りて水は病へま故ま

信は 富苗
ま 可磨
無才女 信
仁戸 百里
工科 風洗
我中 方盤
一草 蓮之
北而 夏飛

故拒

地半

我家やあま故やりのりま
故拒をまありの割る夕
かきくまありのま標か
故拒やほつれくあつ月
故まらの標かのと三日の
あはれやまあつ故拒ま
去標まあまあつか
かきつあつあつあつあつ
陰まあつあつあつあつ
地半あつあつあつあつ

耳考 常矩 其角 由之 牧寺 一朝 凉葉 其角 如行 冰花

鶉の巣
水鷄

取とくそつや戻まや鶉の巣
吹飛ねたたくてあま水鷄が
足音は乃然たたくあ鷄が
木つたり耳くして鳴る水鷄が
吹もあまおしはきくわねが
雷然とつえくもくあ鷄が
雨をそら中て集るあ水鷄が
九十九款岡あおにまかふる
枝折戸のかけあああ鷄が
抑さしていぬる秋の袂鷄が

松橋
水
李下
花去
平人
高川
吾仲
侍炭
氷麦
文素
夏世

翡翠

羽枝

鶉川

たかまといやぬい夜を水鷄が
とねんは水は鷄がまかくわねが
翡翠や羽枝よそりああ鷄
川せまやのあまさああ鷄が
追とく枝よああああ鷄が
羽衣のあえくああああ鷄が
折らるそやうてあああ鷄が
鶉の頬よりあああああ鷄が
とつああああああああ鷄が
首さく鶉のあああああ鷄が

三河
杜若
高川
佐中
兼
乙明
希周
芭蕉
荷弓
信徳
浪化

鶉飼火や魚の公と夏の虫
 の親や姑や川多へお上の
 懐けぬ歌移道と歌や終詞
 十二羽のあれ中野移道は
 うつろひの我うはあ、松子が
 育ちつら月丸歌あつ移道は
 ちのと走る髪と足川の舟
 ころひや世まつらうと志く
 石川や築山村老うは湯り
 築赤や湯りあつ終月燈ひ

北枝 如竹 松蔭 本尊 崇友 可吟 己筑 以裁 柳蔭 配刀

鹿子 洛佛老日よせしあふ、鹿子が
 矢の下に母れ乳哉の世かたは
 口ましくも居らう麻の子れ角改
 嵐の子ろあやれ心歌や山留
 猪下吹うへき歌とりくは
 弓杖小平をく歌のせりれ
 雲さたや尾越の麻乃初ひら
 よ歌麻や多そ火串れ志あ系
 海、福のちのあ歌少くむ人上何
 在の東城志はうとく小録葵

芭蕉 立志 去芳 柳蔭 正秀 嵐雪 嵐休 班系 林凡 其角

照村 柳ひ狩 火串さ 了福 小録

帷子

下

六

辻

夏羽織

熱

晒布

六月

かひの初あけぬのやあゆ美

帷子や帯もさきぬはあし吹

きくひの影いやくしつゆ白

あけ梗麻子ゆきや辻の糸

かひに帯をかくる羽織

吹座もさき波つらぬは羽織

のせのあけぬとさきし

搦入名敷の赤きお出り布

配刀

杜若

支考

伊勢

木欣

乙抄

源亮

楚由

夏

氷室

六月

六月

六月

六月

六月

氷解

一夜酒

祇園會

六月の蜜柑刀色きり氷室

帷子おを界へ出きり氷室

散あけぬのあけぬや氷室

氷室さかからおをあつし

骨折をぬわせしと氷室

今まきのきさかぬひあけぬ

あけぬと氷室はあけぬ氷解

あけぬのあけぬのあけぬ

揮きのあけぬ者あり一夜酒

月輝や松系あけ入佐山

言水

柳吹

希因

文素

子礼

嬰拵

伊勢

老夕

吉角

治位

月夜

一舟

嘉祥

舟次

半夏生

去用

富士詣

月夜にや兒の歌をなほ化私

あけぬやなれ舟のつらき

鷗もまそ引山しり函谷許

瓜の指すつまむら嘉祥

船をよみ楓のりよまをらん

半夏生や神菜のきり舟せ

那小舟の踏とらりく舟をせ

足赤れ去用のへか人あそ

病むん哉昔のやうに去用

あまた雲よ冷くく富士山

清良

涼菴

雲龍

許六

方山

許六

恭勇

秋風

故屋

風水

富士垢離

鞍馬休伐

水盤月鑑

御杖

川社

富士あややのうらと魚のあられ川

舟たりや秋の風乃ちりし歌

竹きりや雪の夜ゆとのれ

里の冬能く出さぬ杖のれ

多もそや舟あられつ御杖川

葦もそひ月のゆきや淡路島

名譽と帯にまうや水盤川

川風より馬帽子かえて御杖

松風に魚のそらまう川社

川や船の太極杖を兼

立圃

麻父

一窟

白空

素手

筑波

既志

白瓦

比叟

形代
 茅の輪
 鷹狩遺言
 腐草化虫
 暑

形代や男女老志うしは
 子成つぬ茅の輪とくちぬ
 鳥つて日はあけ鷹の羽さう
 枯草のほくは出るはくは
 石も木も眼も光る何のさ
 灼きくは独り歩ける夕
 日の園やあはれは暑さ牛の舌
 あはれおちつくと長いの玉所
 元山乃ちうら及ぬ何のさ
 暑さのやはかりし戸の蓋は

横叟
 日向
 雷松
 下宅
 去来
 好春
 正秀
 尚公
 猿稚

夏世

たく異し心競ふは髪のは
 小女の帯にくるまう異り
 肩うさ子も髪あはれ暑さ
 二三書詠は鳴くもあはれ
 石原の端やあはれ物も異
 相の象は候のほく異り
 二本目の扇はあはれ暑さ
 詠中名砂りまらぬあはれ
 てり暑さうす方れのあはれ
 暖暑の款はあはれ暑さ

九尋
 せ角
 それ
 魯野
 秋風
 狐登
 虎葉
 風園
 毛純
 波村

寝るるる枕をうへに置りぬ
 何れと散れまゝの暑が
 髪留れとくろの髪を何れが
 折れまゝの髪を何れが
 ことかかたれぬとる暑が
 何れもや枕をうへに置りぬ
 白雨のちるる月や雲の上
 白雨のちるる月や雲の上

後者 雲被 後者 史邦 李由 大車 免費

夕立

夕立や霞のちるる
 夕立や霞のちるる
 夕立や霞のちるる
 夕立や霞のちるる
 夕立や霞のちるる
 夕立や霞のちるる
 夕立や霞のちるる
 夕立や霞のちるる
 夕立や霞のちるる
 夕立や霞のちるる

史邦 李由 大車 免費

雲の峯

夕立や比のすゝこの勢一死
云ふや和勢う過く一歩
白濁よ家傳ししを食也
夕立や火く乳鯉の眼きく
和くしの松子ぬきふり立が
持せよとや入おしく乳鯉の上
云ふや和勢う過く一歩
夕立や大休系をけし歌き
夕立や和勢う過く一歩
夕立や和勢う過く一歩
夕立や和勢う過く一歩

尾 律の
紫負
巴風
去芳
子梅
伽涼
一系
康工
法九
園指

夏北九

照りつけて夕立電の筋きり
雨の峰あふ乳の端して
雲の峯何と出たして消えり
那社より太鼓おどり電の峰
雲の峰何と出たして消えり
那社より太鼓おどり電の峰
雲の峰何と出たして消えり
那社より太鼓おどり電の峰
雲の峰何と出たして消えり
那社より太鼓おどり電の峰

猿稚
免費
方山
北枝
相雨
歌者
許六
涼菖
吉吟
太素

去用丁

一丁子為死物未や去用印
夜為成爲て何てなる去用丁
體着くつふた先きん去用丁
去用印一屏風ハ事り置所
虫印一也幕狀物もを桜花
卦印一也大道セ海交業種店
虫印一也三子奈老一印一
虫印一也蛙の丁物加人か扇
虫人カ虫振種人々ら去用丁
虫印一也一もく一我まこ

許六
其角
玄来
瓢箪
下枝
付好
此若ふ
宗瑞
得牛
風律

長四十

扇

そと風の二弓裁ひく扇は
日南川行歌思交扇々那
さる人の故尺寸の扇々乳
いあまよ二本出りる何あ奴
扇ていひあけく尺寸の扇が
白腕のたよりつふああまら乳
し扇一よ確知のるも己が
大空良意りたの部也風をく
一ひつあふひくもさる意素
かい糸は巻れやうま園り乳

一象
一笑
尚白
周氏
猿轡
蓮之
許六
袁立
寸長
己筑

圖

行拭

日傘

掛香

簾

休ぬ人

扇打いゝに掛く敷行ぬい
行ぬい小松よりけく仲は
我白ひあしきうけく行拭
梅子よりあか加てて日傘
障子あき春の古き如日傘
うけ香や公と見きくし遠い
雲らぬ人なけりし地獄真が
定なるに昼寐の愛や簾
あらうて居冷きとやたす
空蟬のあふとまけりや休ぬ人

千那

嵐亭

風和

方盤

満月

卯七

素道

芭蕉

先放

希因

夏四十一

抱簾

簾枕

涼

抱いとく涼さうさ休ぬ人
抱簾や夏も涼い山中より
抱かこも君の公もあまき
月影のぬく涼しや簾枕
すくさや夏もぬけや簾枕
涼しきやふゆかう八日親
入親のちかやと涼し舟の中
さくさや舟の船頭の中
すくさや舟の尾より川の中
涼しはや中揺りし藪つゝい

此後
吾平流

山行

吾来

利合

乙由

去来

涼菟

其角

万平

才辨

すーはち様うん是哉あつ下
 涼きや埃よほらうふ休の枝
 空ーきや風は川船の帆去ら
 帷子の脊中ゆくと風きー
 涼き哉あつるきと水車
 すーはち様子にゆく水の音
 櫻かけの中涼き交陪子に
 涼風冬日出交時を名にうれ
 すーきや等にいりう約の糸
 空ーはち様へおる白の船りお

支考 卯七 正秀 備門 木周 一有 洒事 毒子 榛夏 樗良

夏四十二

風薫

涼きや爰あきせはえんおん
 赤板哉登てや風のうぬさ
 出波わ風のうぬられお松子
 凡かあれそー其の下表を
 松陰より入川ありて涼きと
 さーきよの橋を回つてうら
 破風のよ日影やとら夕涼
 夕涼よくと男にせしり
 秘座をわくうら一交涼を
 夜まよわ向いの唐冬月を

納涼

秋瓜 芭蕉 漱士 那坡 来山 芭蕉 松涛 去芳 里圃

赤水

つ立ちく帆よりなる神や涼と舟
常一以中哉出ゆく涼と舟
唇に雲つく兒のすく見く乳
中弓れ塚を見て見る夕暮と
夕涼とゆふのひひの兒年より
果てて我命もつげ夕暮と
日枝下りけく暮る夜や涼床
今捨て休に有あゆゆの涼
松の葉もくも暮る夕暮と
水赤や緑も花も流るゆと

文子
遊刀
千那
木導
乙由
老士
登元
柳若
糸代
き角

清水

赤水や飯の茹くも熱休の限
昔小車流れゆく通る清水が
きれ梅は遠と有清水が
ま川もりの世もあし山清水
る柳枝と雲より通る清水が
高念佛中も涼も清水が
引立ちくも山のまも清水が
雲影の白ひく世も山清水
松の色には雲のかさる清水が
小川もあゆ流る清水が

巴風
荷分
色蕉
猿錐
舟徑
舟扇
際月
相之
一道
尚向

社等通のけり、尾張 徐寅
 連あまきく傳せく尾張 文深
 切あまきく入あまきく尾張 芳斗
 桶あまきく置く留さく尾張 心太
 証あまきく六部あまきく尾張 其角
 けり井やや尾張 桐雨
 ゆきまきく尾張 一招
 清瀆の水汲よきく尾張 芭蕉
 頃礼のち尾張 其角

きり井

麻地酒

心太

夏四四

四餅子約の遊上や尾張 秋之坊
 雲の象成すく尾張 園室
 名くく起桶の枚多や尾張 貞佐
 七くく入水にも角や尾張 信位
 玉川水尾張 巴辭
 すくけり葛の色尾張 系解
 葛水やま尾張 支考
 切麦や冷尾張 其角
 冷汁尾張

葛水

切麦

冷汁

水飯 于飯 菱切糸 香露散 深取 子桃 楊梅 李 林擒

水飯や梅をくたつてのまゝ
于飯や梅をきやく刺のつま
菱切糸を臺のへりやまを花玉
山水より湯うちきく香露散
木のまから光る銀やうら
楊梅や千種佛を名にのむ枝
李のうらめしきうらめしき李うら
まの取も林擒を軸て西ふ
吳の起焼り食つて林擒は

丹徒 百尾 谿 重頼 舟井 芳翁 誠業 孫秀 之角 太善

乙葵 百日如

又くまの百日如を名にのむ枝
ちんちん咲くくく百日如
百日如を名にのむ枝はあけ
なすくこのまから光る銀や
梅子と川魚に足四わけり
石井や梅梅とてうらめし
梅子や梅も名も花のま
はのりや蓮をんれり
暖の目録を名にのむ枝

温故 千代 麦守 惟公 免黄 許六 希因 洲春 乙物

蓮

瞿麦

包ちぬく氷とのひる蓮う乳
佛光起く公をさうまきう那
蓮の志林しううたふあふ之
をちけわ後かり知蓮の志
ふ或はひのた氣にちやぬ蓮の花
あつ井いさき中かゝ蓮の色
極糸の曇りゆくまをれを乳
蓮の志たぬふへ響かぬ骨
起くく人あ笑ひ蓮の花
蓮比やけきも現の志ひひ

形坡 秋鬼 支考 梢風 後若 以之 杜亮 極若 可成 宿葉
夏四十一

海写

何骨

麦の花

専菜

ちが蓮や糸の有とぬ乳を
は写る田糸の教り引きり
海写り馬糸ちがぬ水の志
何骨やけきも現の志ひひ
何骨の一輪つとぬ寸とぬ
麦咲く軽喉後すまふ入はが
鳴の葉た抱く後ち麦の志
引かたにひの志ちぬあ草が
専菜やあ草を解く水の味
海写りあぬあひの志ぬ乃と

林行 如行 兼手 伊藤 随友 大和 一家 乙亥 守也 尚志 正考 曾北

海雲

ふぶきや貝取出又と雲は
水産り死たる海雲のそと

北前
雲解

蘭の花

蘭の花はひらく水の溜り

信後
花解

藍川

藍川や藻の双さねを

信後
乙由

鉄線石

山伏の鐘をこきり鉄線石

乙由

眼皮

山伏の鐘をこきり鉄線石

乙由

釣鐘

花の釣鐘の音は

乙由

凌霄花

凌霄花は後をけりる

乙由

蒲の種

蒲の種はあきかた

乙由

鏡草

鏡草はあきかた

乙由

虎の尾

虎の尾はあきかた

乙由

風葉

風葉はあきかた

乙由

玉簪

玉簪はあきかた

乙由

雪の下

雪の下はあきかた

乙由

夏平七

射干

紫菀

青兔灯

赤子

麻

小角豆

陰やうくまひ乳志わさの下

ひあふれや御陵一いころやう

松麻あがれ旋子のかきしら

花やをり実やう麻下は紫菀の

兔灯や青いあうま青いほ

赤子や名にきれ水か衣を

あけかう麻あ直に二油の汁

あふのちまあれいささく麻

麻かりて死すれ通る小あ乳

たはてあ紫下に集の乳まきけ

柳菟

乳子

希周

若仲

昌房

重厚

配刀

強通

斜旗

痴弱

夏四十八

強の花

其桑瓜

強の急なまくまあ子似くま

馬り射のまき替りや強の急

電はまわらう出ま射如くま

初高葉望まやうん輪にや世

我ま似乳二のまうり高桑瓜

水かえんあまうり高桑瓜

瓜の皮水も蛙まうり高桑瓜

さう瓜やああを成一か強

起う小墨の汁はれま高桑瓜

瓜あまうり高桑瓜

素花

巴水

周雨

芭蕉

游刀

其向

支考

猿鉗

立身

南風
夕顔

九つ巻のつぼみ花を結んで花を葉
ま葉をよもぎつゆりよ葉が
南風のあつにひつむり芽の形
ゆめを破る秋のつぼみの花
折るよもぎつゆりよ葉が
夕顔のつぼみ花を結んで花を葉
夕顔のつぼみ花を結んで花を葉
夕顔のつぼみ花を結んで花を葉
夕顔のつぼみ花を結んで花を葉
夕顔のつぼみ花を結んで花を葉

巴靜
蝶愛
遊水
色蕉
そ角
一笑
将終
去来
許六
三惟

夏四十九

夕顔のつぼみ花を結んで花を葉
ゆめを破る秋のつぼみの花
折るよもぎつゆりよ葉が
夕顔のつぼみ花を結んで花を葉
夕顔のつぼみ花を結んで花を葉
夕顔のつぼみ花を結んで花を葉
夕顔のつぼみ花を結んで花を葉
夕顔のつぼみ花を結んで花を葉
夕顔のつぼみ花を結んで花を葉
夕顔のつぼみ花を結んで花を葉

種水
尚白
当吟
乙由
、
岷青
可風
百朋
智泰
松若

登歌

登白の雨ふたは其の雨
登歌や一夏山伏の巻つゝ
ひらけの空わたるふかしの
穀子花の結のつらふの
登白の牛の登基の遠うま
登白のやまの雲も方分
ひらけののりきくまの上
ひらけの西つよきと登歌
登白の扇の巻たぐひ
登白のやまの雲の中は

冬季
三筑
千代
玄武
也者
不有
治毛
細立
支考
月

楮の花

神雲花

雲雀鶯

蟬

ひらけのやまの雲も方分
登歌や一夏山伏の巻つゝ
ひらけの空わたるふかしの
穀子花の結のつらふの
登白の牛の登基の遠うま
登白のやまの雲も方分
ひらけののりきくまの上
ひらけの西つよきと登歌
登白の扇の巻たぐひ
登白のやまの雲の中は

法九
乙由
乙由
乙由
乙由
乙由
乙由
乙由
乙由
乙由

宣輝

飛の心は好言流しやは松の枝
蟬の心は探くまけりぬさ板
蟬の心はまゝ多量葉の仕込
はらうつらむやうと蟬の心
凡ゆると一日鳴やとては急
いぬは心もかたし蟬の声
抱く木もまゝ勅さ蟬乃如
我ひ心もまゝやうとせしは
あに心は法志ふては蟬のか
目の玉も取く出り蟬のう

松枝
高川
支考
餘風
小春
木兒
可風
文考
去考
外高

夏又十一

夏虫

夏虫の火取取はまゝ死
すたまの蚊よと海や夏の虫
いあもてとまゝとるや火取主
行ね燃くまゝありく夏の野
蟬もたつたまゝ詠らるる
夏の半ハ蟬よとて牛の首
蓋まゝか出く蟬の心考が
告しきや笛系けけ牛の蟻
牛もたつた蟻の心考が
頬と蟻の心考が

我峯
昌房
神風
閑更
千那
等水
牧考
九考
老士

夏又十一

又去

納

毛虫

年龜虫

川將

始れそ夏も誠気云の始
系法もあき行のそ乃り集
いたるんゆくの細道小雨降
負しれたぬのあかえ毛虫が
踏付く熱身よひ毛虫が
系起る心志を登りた子虫
川うらや蒸かぬりし始る有
川かろや背こころく月涼く
川物也一日習ふ養の業
川うらや伴勢武者ひら赤禪

冬

冬

冬

冬

冬

冬

冬

冬

冬

冬

夏五十二

精約

海月取

仲能

夏瘦

秋近

川かろや上下のそいぬの禪
精約や漢語我出てみせ常
精つらや不知火あつぬ波の上
精武押も眠こそく海月取
漢前も人若の糸や仲能急
仲能去るもや風も増か減
夏瘦や尺ぬらんに心も地る
あ川や智や跪きく涼めり
焼ちりぬ公のそわにむし半
秋近も大そかり結の候

立和

曾北

燃爇

丙端

言水

隆己

友静

元法

芭蕉

Handwritten text in a rectangular frame, organized into columns. The text is written in a cursive style and appears to be a list or a series of entries. The characters are somewhat faded and difficult to decipher precisely, but they seem to follow a structured format, possibly including names, titles, or dates. The text is arranged in approximately 10 vertical columns, with the rightmost column being the most legible.

